

小田実全集（評論 第26巻）

崇高について



講談社

小田実全集

Makoto Oda



はじめに

この本は、紀元一世紀の「ローマ帝国」のなかで生きていたギリシア人の批評家「ロンギノス」の「崇高について」と、二十世紀末の現代日本、現代世界に生きる日本人作家の私、小田実の「『被災地』」「ロンギノス」「戦後文学」から始まるいくつかの評論より成る「共著」の本である。もちろん話し合つて「共著」を出すことにしたのではない。一方的に私が彼に無断で「共著」をつくり上げ、世に出すことにした。天界の彼が怒れば、あやまるほかはない。その前提での「押しかけ共著」だ。

この「押しかけ共著」は、(Ⅰ)の私の評論、「『被災地』」「ロンギノス」「戦後文学」、(Ⅱ)の私の訳による「ロンギノス」の「崇高について」、(Ⅲ)の私の「『市民国家』の文学観」に始まる三つの評論、(Ⅳ)のこの「押しかけ共著」のしめくくりの意味をもつものとしてそこに選んだ「コロノスのオイディプス」と題する私の評論——この四つの部分より成り立っている。

四つの部分はそれぞれに独立している。「ロンギノス」は、もちろん、後世はるか遠くの地に生きる私とは無関係に彼の論を書いたのだし、私は私で、彼の論に触発されながらではあつても、自分での問題に対しながら自分の論を書いた。(Ⅲ)は、たしかに「崇高について」により直接的にかわつたかたちで書いた評論で、「崇高について」の解説的意味をもつが(その意味で(Ⅲ)にまとめ上げた「『市民国家』の文学観」と「『文』」と「『市民国家』の市民」は、どちらも、最初に私

が「崇高について」の訳の一部分を発表した河合文化教育研究所の「おんぱろす」のために、その発表の一端の「前書き」として書いたものだ。三つの評論の最後の『市民国家』の『トボグラフィ』は、この「押しかけ共著」をまとめ上げることに関連して新らしく書いた。三つとも独立して書いたので、内容に重複しているところがある)、この三つの評論にしても、「崇高について」から独立しても読めるものであるにちがいない。三つをまとめて言うなら、三つはともに私の「ロンギノス」論であるとともに私の「古代ギリシア論」、いや、もう少し厳密に言って「古代アテナイ論」である。私はそのつもりで書いた。(Ⅰ)の『被災地』『ロンギノス』『戦後文学』も、私の「被災地」から出発しての「私的文学論」(「私的」の意味については、本文のなかにある)であって、「ロンギノス」論、そして、「崇高について」の解説ではない。ただ、私は、そこで、私が、なぜ、今、現在、「崇高について」をふたたび考え始めたか、また訳を本格的に再開して完成に至ったかを述べている。その意味で、私はこの「私的文学論」をこの「共著」の冒頭におくことにした。まず、(Ⅱ)から読んでいただきたい。

『被災地』『ロンギノス』『戦後文学』は、この「共著」のいわば「序論」である。そして、それが「序論」なら、「結論」としてあるのが(Ⅳ)の「コロノスのオイディプス」である。この文学論(これもまた、私の言う「私的文学論」である)には「ロンギノス」という名前さえ出て来ていない。しかし、私は私の考える「崇高」について書いた。文学においての、いや、人間そのものにおいての「崇高」の事例が「コロノスのオイディプス」だった。私は私のこの「崇高について」を、「ロンギノス」の「崇高について」をかつて読むことがなかったなら、おそらく書いていなかった。(Ⅰ)の「序論」、

(Ⅳ)の「結論」——二つを貫いて、基底に「ロンギノス」の「崇高について」がある。

その意味で、私は私のつたない訳ながら(また、学至らざる私のことだ。まちがいはいくらもあるにちがいない。あれば教えていただきたい)訳文を(Ⅱ)の位置にすえてこの「押しかけ共著」の本をつくり、全体の題名として「崇高について」を選び、世に出すことにした。

しかし、なぜ、今、現在、この現代世界、ことに日本で世に出す必要があるのか。その意義について、(Ⅰ)の「序論」のなかで私の認識、そして、思いを書いた。この私の認識、思いは、「押しかけ共著」の相手の天界の「ロンギノス」も判つてくれるにちがいないと思う。そう期待する。

小田
実

目次

はじめに

I 「被災地」「ロンギノス」「戦後文学」

——被災地からの「私的文学論」——

9

II 崇高について

「ロンギノス」(小田実 訳)

65

III 「市民国家」の文学観

「文」と「市民国家」の市民

「市民国家」の「トポグラフィ」

164

184

198

IV 「コロノスのオイディプス」

231

あとがき

264

崇高について

I 「被災地」「ロンギノス」「戦後文学」

——被災地からの「私的文学論」——

これから書くことは「私的評論」である。「文学論」であつても、「私的文学論」である。そのつもりで書くことにしたい。

ただ、「私的評論」「私的文学論」であつても、「私評論」「私文学論」ではない。前者と後者はどうちがうか。子細にわたつて論じ上げるつもりはないが、「私評論」「私文学論」では、世界の中心に「私」がのさばつていて、のさばる「私」が「私」の感性を金科玉条のごとくふりまわして、とめどがない。私には多くの人があつたがる小林秀雄の評論、文学論は、その「私評論」「私文学論」の典型であるように見える。ときには面白いが、いったんその独善、独裁的感性が鼻につくとやりきれないし、また退屈だ。

「私的評論」「私的文学論」では、「私」をもう少し時間的にも空間的にもひろいところにおいて考える。時間的にひろいところというのは、何も過去や歴史にかかわるだけではない。未来——そこへの見通しも大いにかかわつて来る。空間的にひろいところというのはおのれが所属する集団なり民族なり社会なり国家なりを超えるだけでなく、今おのれが住み、生きる世界全体のへつきりを超えて、殖谷雄高流に言えば、宇宙、そののつべらぼうにもかかわつている。あるいは逆におのれがそのひとりである人間を「ミクロ・コスモス」と観ずれば、逆にかえつてあくまで狭く深く人間存在を穿孔する。その作業にも関係する。

どの場合にあつても、「私」がいるところはひろいので（人間の内部も、人間を「ミクロ・コスモス」

と観ずれば、無限にひろい)、おのれひとりの感性をそうやすやすと絶対視しておらび上げることができないし、そのひろいところにあまたある他の「私」の感性の存在、運動を無視、抹殺することはできない。

このところ私は「私」を主人公にした、あるいは語り手とした小説をよく書いていたが、私としては、「私小説」——ことばの意味することをもっと正確に言いあらわすために片カナを使って書いておくと、「ワタクシ小説」——を写っているつもりはない。一昨(九六)年、私は「私」を語り手として短篇小説『アボジ』を踏む(この作品をふくめて同じ題名の私の短篇集が講談社から出版されている)を書いた。昨(九七)年、この原稿用紙の枚数にしてわずか二三枚の文字通りの短篇小説は「川端康成文学賞」に選ばれたが、選者の選評のなかにいくつか、「小田氏がこのような『私小説』を書くとは思っていなかった。おどろいた」ということばがあった。こうした感想に文句をつけるつもりはない。ただ、私に言わせれば、私の書いたものは「私小説」——「ワタクシ小説」ではなかった。「私的小説」だった。

もつとも「ポバリー夫人はわたしだ」流の言い方をするなら、小説のたいいは「私的小説」だと言つてよいだろう。ことにすぐれた小説には、隠されたかたちで「私」が無数にちりばめられているものだ。ただ、私の言う「私的小説」では、もう少し「私」に接近している。いや、寄りそっている。「私的評論」「私的文学論」にあつても、ことは同じだ。

私が今この「私的評論」「私的文学論」を書き出しているのは、兵庫県西宮の集合住宅の私の住居においてのことだが、窓からは六甲山系の山脈やまなみ、そこにせり上って行く西宮から芦屋にかけての街並み、さらにそのむこうは神戸で、ときとして新神戸駅まえの超高層建築のホテルまで見えて来たりする遠景、べつの窓からは、右方に芦屋浜の人工島、左方は西宮浜の人工島にはさまれた、二つの人工島ができ上がってからはまるでもう池のように狭くなってしまったが、それでも海であることにまらがないではないその海の眺め——というぐあいに、私のところにやって来た訪問者のたいていが第一声に「いいところですね」を口にする山と海の眺めがひろがるのだが、その眺めを見ていて私の心が一向に和まないし、開かれた気持ちになつて来ないのは、この眺めの土地が三年半前、一九九五年一月十七日未明にかつては「兵庫県南部地震」と呼ばれ、今は「阪神・淡路大震災」と呼ばれるようになった大地震が直撃した被災地であるからだ。このことばで思い出を語っているつもりはない。震災のあとは今なお歴然として残っている。それは震災がもたらした問題が今なお山積されて残っているということだ。そして、その問題の多くが日本全体の問題としてある。日本全体に通底している。

まず山の眺めだが、六甲山系の山脈はあちこちミドリが裂けて、無残に山肌が露出している。豪雨が来たり、長雨がつづいたりするといつも不安に駆られるのは、そのあちこちのミドリの裂け目からいつ何んとき土砂の奔流が山津波となつて下方の街なみに襲いかかつて来るかも知れないからだ。実際、大震災の直後、土砂流が私が眺める地域の一面、私の住む西宮市の仁川地区に襲いかかつて一瞬

のうちに家屋をそこに住む人たちともにあるいは流し、あるいは生き埋めにした。私が今、谷崎潤一郎の「細雪」をただの文学作品として読めないでいるのは、「細雪」のなかに主人公のひとりの女性の体験を通して、彼女が、そしてまた作者谷崎が出くわした六甲山系からの土砂流の噴出の場面がなまなましく描き出されているからである。その現場も私の視界のなかのつい近くのところにある。

「細雪」で思い出すのは、この場面だけではない。地震がこの地域を襲う何年かまえに大阪のテレビジョン局がどこかの大学に頼んで、今もしこの地域に「細雪」に描かれた出水をひき起こしたほどの雨量の雨が降れば、どういう結果になるかを予測する番組をつくったことだ。前提としてまず言っておかなければならないのは、あれ以来、それほどの雨量の雨がこの地域に降っていないことだが、三回放映される予定だった番組が一回放映されただけであとは中止になってしまったのは、その予測の結果が、もし降れば、「万事、お手上げ」であつたからだ。だから、降らないことに決めたのだろう。

私とその結論をまったく妥当だと考えたのは、考えざるを得なかったのは、「細雪」の時代にくらべればなるほど砂防ダムなどの防災施設も少しはましにつくられて来ていたかも知れないが、その「少しはましに」をはるかに上まわる自然破壊の「乱開発」も戦後このかた、ことに当時のバブル経済の繁栄のなかで巨大になされて来たからだ。六甲山系にむかつて、大中小さまざまな建築群がその谷間にねじ込むようにして強引、傍若無人にせり上つて行く街なみのさまを住居の窓から私は何年にもわたって見つけ来てた。

六甲山系はそうした外からの自然破壊を受けているだけではなかった。その体内を貫通するかたちで無数に穴が掘られ、トンネルが貫通して（地震前には、巨大な地下劇場の建設までがもくろまれて

いた。その計画は、「神戸市株式会社」の異名をとる県、市の自治体の行政によっていまだに完全には破棄されていない。喉元すぎればなんとやらで、また息を吹き返すにちがいない）、この山系の自然はまさに外側からと内側からの破壊にさらされて満身創痍であった。私は六、七年まえ、新幹線の長大なトンネルの上方の住宅に住む西宮のその地区の住民の、列車が通るたびに穴全体が震動するという事態から問題にして、こんな野放図な自然破壊をつづけているといつか大地震が起ることになるのではないかと書いたことがある。実際に私の「予言」が適中して大地震が起こったとき、私がまづ思い出したのは、その私自身の「予言」のことだった。しかし、私には自分の「予言」の適中をよろこぶ余裕はなかった。私自身が地震によつて少し大げさに言えば生死の境目に立っていた。私がそのときもつたのは、「これで予言者が死んではつまらない」という思いであった。

地震直後、彼女自身も被災した芦屋市長は（ついでに書いておけば、人口八万人の芦屋市は人口比率、家屋数比率から言つて、死傷者、全壊家屋数は最多だった都市だ。私の住居は西宮の外れ、芦屋と境を接する位置にある）、「細雪」の出水の大被害の体験をもつ都市の「自分たちが想定して来た自然災害は地震ではなく出水でした」と正直に告白したが、そう言いながら、彼女も、やはり、それほどの雨量の雨は二度と降ることはないと信じていたにちがいない。それは、芦屋市が、市長のことばとはうらはらに、出水であれ地震であれ、自然災害の発生に対して何んの準備もしないで来ていて、大地震にさいしてすべてのマヤカシが露呈されることになった事実が端的に示していた。市長自身が、パンひとつ、毛布一枚も市民のための非常用の備蓄をして来なかったと地震後述べていたのだから世話はない。人口四十万人の西宮市も大きなことは言えない。被災時の年度の西宮市の年間予算は一五二

五億円で、全国で裕福な都市の部類に属するが、年間の非常災害対策費はわずか四五〇〇万円で、これは、まず、このあたりでたいして上等でない「3DK」の集合住宅一戸分を買い得る金額にすぎない。人口四十万人に対して四五〇〇万円では、パンも毛布もその他の物品も何も準備できるはずがないと、被災後一週間経ってようやくかかった電話で市の災害対策副本部長は当然のごとく言った。この年間非常災害対策費の数字を探し出すのに、はじめ彼は知らず、それをどこから探し出すのに二時間ほどかかっている。

私が、今、窓から山を眺めながら、そうしたもろもろのことを思い出さざるを得ないのは、事態が根本的には何ひとつ変っていないからだ。乱開発があいかわらずつづけられていることは、山の眺めを見てすぐ判ることだし、芦屋市も西宮市も、かつて私が住んでいた「西」ベルリンのように食糧からトイレット・ペイパーに至るまでの非常災害対策備品を一月分備蓄し始めたという話も聞かない（その備品は、「西」ベルリンの場合、何カ月かごとに更新されていた）。山の眺めについて言えば、乱開発の再開、継続に新しくつけ加わったのは、山系の各地のミドリにできた裂け目だ。このごろは忘れたのか、それとも「細雪」の出水のときほどの雨量の雨は降らないとまたもや決めたのか、ひところは「地震後はあちこち山が裂けていて危険です。ご注意ください」とテレビジョンの番組などに県や市の防災担当の職員が出演して警告していたのが、最近はその種の出演はまったくなくなった。しかし、「ご注意ください」とひところ警告していたその職員たちが私たち市民に教えてくれたことは、「危険が来たら、何より早く逃げて下さい」という子供にでも言えることだった。しかし、どうすれば何より早く逃げられるのか、彼らは教えてくれなかった。

視線を下方に下げると、高架の高速道路が街なかを貫通してつづいているのが見える。今、日本の各地でいくらでも見られる光景だが、私がまたここで過去から現在にわたるもろもろのことを考え出さざるを得ないのは、その高速道路が、今この文章を読まれる方もテレビジョンの画面でたぶん見られたことがあるだろう、みごとに根こそぎ倒壊してそのこと自体で死傷者を出した高速道路であるからだけではない（「阪神・淡路大震災」の奇しくも一年前、一九九四年一月十七日にロサンジェルズ近郊のノースリッジで起こった地震で高速道路があちこちで切断、倒壊したとき、日本の土木技術の専門家たちが、日本の土木技術は優秀で、アメリカ合州国の場合のようなことは起こらないと言ったことは、憶えていられる方はいられるにちがいない。私もよく憶えていて、地震のあとその高速道路の惨状を見たときにまず思い出したのは彼らのそのことばだった）。現在にかかわって思い出すのは、地震のあと、道路公団などの専門家たちが、高速道路が倒壊したのは高架の道路を支える橋脚が一本脚で、強度が不足していたからだ、再建にさいしては二本脚にすると明言していたことだ。そして、もちろん、再建工事には、かつてあったような手抜き工事は一切させないとも言明していたのだが、今、再建されて私の住居のつい近くを走っている高速道路は一本脚のものだし、近くの工事の現場で私はいくつも手抜き工事としか思われぬ事例に出会っている。道路公団側に言わせれば、橋脚は一本脚といえども鉄板を一枚巻いたから大丈夫だ、手抜き工事は、あなた方の思いすごしで一切ありませんということになるのだが、すべてが自分たちが言っていることだ。二本脚のはずをまたも

や一本脚にした理由は、二本脚では費用がかかりすぎる、時間がない、おしまい、日本の土木技術は優秀——これらはすべてかつて彼らが口にした通りのことだ。

私の住居の集合住宅からまっすぐに上手へ上つてその高速道路を越えたあたりが、私がよく子供を連れて市場に買い物に出かけていた西宮の「下町」だが、小さな商店が建ち並んでいたその一画は地震のときの被害は大きくて一挙に八十人の死者を出した。しかし、悲劇はそのあともつづいて、その「下町」には、そういうこまごました小さな商店や家やらが密集していたからこそ被害が大きかったのだという理由づけの下で区画整理が住民の反対を押し切って強行されて、つい最近までそれまで細々と仮設店舗を地震の跡地に建てて営業していた住民たちは追い出されてしまった。行ってみると、今は大きな道路をつけるための工事で、ただブルドーザーが行き来する「さら地」に全体がなつてしまっている。

こうした強引な区画整理は、神戸をはじめとして被災地各市で地震直後から住民の反対を斥けて行なわれて来ていることだが、多くの場合、もともとから各市で長年もくろまれて来ていた「都市再開発計画」に基づいてのものだ。

このもともとからあった「都市再開発計画」は、やろうと思えば、土地の買収などで途方もない巨額の金がかかる。どうしようか、いかに実現しようかと思案しているうちに地震が起こって、地上の一切のものを叩きつぶし、燃え上らせてしまった。これで区画整理を強引に押しつけ、みごとに安上りに計画を実現することができる、まさに行政の側にとって千載一遇の好機である。やれ、やるべし——でことは動き出した。

まさか——と思われる人がいられるかも知れないが、実際、ことはそんなふうにして、そんなふうには思わざるを得ないかたちで、進んで来ている。「開発」あるいは「再開発」を大義名分にかかげて、公共土木事業を中心にして各企業、各業者との結託、癒着がはなはだしいゆえに、いや、そこで行政自らが「第三セクター」やら何やらをつくり出して自らが「デベロッパー」にもなつて金儲けする——そのかたちでの「都市経営」（市長自身が「都市行政」はすなわち「都市経営」であると説明して来た）のゆえに「神戸市株式会社」の異名をもつた神戸の例で言えば（「神戸市株式会社」の中型版が「西宮市株式会社」、小型版が「芦屋市株式会社」だ）、地震後二月余経つて、新聞が書いていた。「後で知つて驚いたことがある。火災がなお続き、多くの人ががれきの下に埋もれていた地震の翌日、都市計画局の職員約二百人が、自転車やバイクで市内に散つた。救出のためではない。都市計画の基礎資料とするため、地区ごとに建物の倒壊、焼失度合いを調査したのだ。局幹部でさえ、『こんなことをしていいのか』と葛藤があつたという。」（『毎日新聞』95・3・30）

この記事を読んでそのとき私もおどろいたが、もう今は類似のことがあつたとしてもおどろきはない。あまりにも多くその種の事例に出くわして来たからだ。誤解のないように述べておきたいが、この記事のなかに出て来る「基礎資料」ということばについてだが、集めて来た「基礎資料」をもとにしてじっくり復興計画をたてるというようなことを「都市計画局」は企画していたのではない。職員約二百人が自転車やバイクで地震の翌日に出かけたのは、どこがもつともつぶれているか、つまり、どこでもつとも安上りにもとからあつた「都市再開発計画」をやつてのけられるかについての「基礎資料」を集めるためだつた。ただ、以前とちがうのは、「都市再開発計画」ということばに「防災」

の二文字を冠して「防災都市再開発計画」としただけのことだ。さつき引用した新聞記事は次のようにも書いていた。「計画は『初めに道路ありき』としか言いようがない。防災は後からつけた理屈に映る」。

四

視線を転じて海ぞいにむけると、まず目につくのは、いや、今や目につかなくなつたのは、ついこのあいだまで私の住居からわずかな距離のところに私の住居の集合住宅同様に海ぞいに立つていた十一階建ての巨大な三棟の集合住宅である。全壊とされたそれらは一見すると無傷で、「へえ、あれが全壊！」と見る人はみんなおどろいたが、よく見ると三棟はそれぞれがいちがいにピサの斜塔よろしく傾いていた。それがそのかたちで地震後三年以上立つていたのは、住民の話し合いがまとまらなかつたからだ、まとまらない根本原理は解体、再建に巨額の出費が住民一戸一戸に必要なことだ。多くが「住宅ローン」でその集合住宅に住居を購入していたのだが、わが日本国は、何んらかの減免措置をといて被災者の声は一切無視して全壊した住居に対しても「住宅ローン」の返済を強いる国なので、彼らもこれまでもつぶれて住んでもいない集合住宅の「住宅ローン」の返済を行なつて来ていた。再建で新しく建てられる集合住宅に「住宅ローン」で入るとなると、それこそ一方は仮空の、他方は実在の住居に対しての「住宅ローン」という二重ローンで、まことにしんどい。しかし、こうしたことは被災地では、まったくあたりまえのことだ。そう思つて、あきらめるよりほかにない。こうした問題について、わが日本は何んの助けの手もさしのべてくれないお国柄の国なのだからだ。

三年話がつかなかったあと、お金がない住民、あるいは、仮空、実在の二重ローンの負担にたえかねた住民は出て行つて解体にとりかかったのが五カ月まえ、一一階建て三棟は今は完全に姿を消して、今はただの「さら地」だ。

視線をさらに海側にむけると、そこに大きくひろがるのは住民人口一万三千人余の芦屋浜の広大な人工島だが、そこもまた震災から現在に至るもろろのことを考えざるを得ない場所だ。

ここでも高度な——それはずの日本の土木技術、科学技術の水準から言つてあり得べからざる事態がいくつも起こったことを述べておきたい。ひとつは、まず、地震の直後に、この人工島が、神戸のポート・アイランド、六甲アイランド、あるいは、つい隣の芦屋浜とは小さな池のような海をへだててむかい合う西宮浜などの他の人工島と同じように住民の生命をおびやかす、不安のどん底におとし入れた、一瞬にして一望泥海と化す液状化現象をひき起こしたことである。私はここでも、こうした埋め立て地は地盤沈下が起こつて危ないのではないかというある公開の席での私の予言者じみた発言を思い出すのだが、同時に思い出すのは、その席で「あなたの考え方は古すぎる、日本の現在の土木技術はもつと進んでいますよ」と私に食つてかかつて来た専門家のことだ。

液状化の結果として、これはどの人工島でも起こつた事態だったが、芦屋浜の地盤は、高度が一メートル沈下し、周囲が二メートル拡がった。これは子供が海岸の波打ちぎわにつくつた小さな人工島に波が来て、まさに液状化で高さが低くなるのと同時に周囲が拡散して崩壊しかかっているようなものだ。ちがうのは子供の人工島とちがつてほんもの大人の人工島の上には住民がまた住んでいることと、もうひとつ、子供の人工島は子供が両手で島を左右から一挙に囲い込んで崩壊をくいとめるこ

とができるが、大人の人工島の場合には、そうした作業は天界の神様にはできて地上のわれらただの大人たちには技術的にも費用の点でもまったくできないことだ。それでどうしたのかと言うと、地盤沈下、周囲拡散はそのまま放置して、周囲の崩壊のあとをコンクリートで覆い隠した、つまり、見かけでごまかした。私は私の住居の窓から毎日、その見かけのごまかしを眺めていることになる。

見かけのごまかしの人工島のむこうには、六百戸の住宅、その住宅街の中心に林立する最高二九階建ての計五二棟の超高層、高層の集合住宅群——それが私が毎日その人工島で眺めている風景だが、眺めていていい気持がしないのは、六百戸の住宅のたいていが、液化化の結果として傾いたままになっていることを知っているからだ。この場合のひき起こしは技術的には可能らしいが、多額の費用がかかるので住民は我慢して傾いた住宅に住みつづけている。

そのたぐいまれな優秀性において「建設大臣賞」を授与された超高層、高層住宅群では多くが鉄骨主柱切断というあり得べからざる事態になったが、建設会社はすぐさま電気熔接で切断のあと一切を消した。そして言った。「これで倒れなかったことが立証できた」。

五

政治のことを少し書く。書いておきたいのは、この地域は、今や日本全体のものとなった「総与党政治」を昔からやって来た、その意味での政治的「先進地域」であることだ。日本全体の「総与党政治」では共産党はその政治のワク外にいるが、たとえば、神戸の場合、昨九七年の市長選挙では、共産党も対抗候補者を自らが出し、一種の「野党連合」をつくってかなり善戦したが、結局は、前回、五年

前の選挙では共産党をふくめての文字通りの「総与党体制」に支持されて容易に再選をはたした（その選挙での投票率は二十パーセント少し。これでは選挙と言えないだろう。まして、「民主主義」ではない）二期目の市長が三期目の市長になった。ということは、文字通りの「総与党体制」は根本的にかわっていないことだろう。この「総与党体制」は労働組合をふくみ込んでの、いや、それを中心に強力にすえた「総与党体制」で、だからこそ、「神戸市株式会社」は地震が起ころうが何が来ようがゆらぎがなく、これまでやって来たことを人工島の新しい造成であろうと、決して採算のとれるはずもないとされる海上空港の建設であろうと市民の反対を押し切つて強引に押し進める。基本は変らず、経済利益追求、優先の開発路線で、そのなかで、たとえば、共産党出身のもと労組委員長が「第三セクター」方式の関連会社の社長に就任するというようなことはこれまでいくらでも行なわれて来たし、これからいくらでも行なわれることだ。

私がこの文字通りの「総与党体制」にいつもかつての社会主義国の政治体制を直接の連想として思い浮かべるのは、この市の労働組合の機関紙が、現市長の二期目のそれこそ文字通りの「総与党体制」の選挙で、その選挙を「空港、公共料金、固定資産税、埋め立てなど神戸市政を批判するグループとの対決」の選挙だと規定していたからでもあれば、再選された現市長が震災一周年の犠牲者の追悼式で、「住民と手を携え、未来に誇れる真の復興をとげる」と誓っていたからでもある。彼はそう皇太子、首相などのおえら方のままで誓ってみせながら、そのまえにもそのあとにも住民と手を携えるどころか、昨年末の彼にとつての三期目の市長選のときまで市民のまえに姿を現わさなかった。かつての社会主義国の独裁者のなかには、いくらでもこういう手合いがいた。

この「総与党体制」は、西宮の私の住居の窓からも人工島の眺めを通して十分に読みとれることだ。人工島の中心に林立する超高層、高層の集合住宅建設は、おそらく「総与党体制」の「保守」の部分の「利権」に結びついていったことだろうし、「革新」部分は住宅地のなかにたとえば福祉施設をつくることに力を注いで選挙の票を稼ぐ。もちろん、こうした「革新」部分の「利権」も人工島の造成、超高層、高層集合住宅、住宅の建設あつてのことだから、「革新」をふくみ込んでの「政・官・財」の癒着構造は強力にでき上つて（被災地の場合、この「社会主義国」の癒着構造は、地元の新聞、テレビジョンなどのマス・メディア、あるいは、著名知識人、学者などをふくみ込んでがっちり形成されて来ていたから、これはまさに「政・官・財・学・文」の癒着構造だ）、市の「株式会社」を支える。ということとは、「株式会社」は利益の拡大を求めて動くのだから、人工島の造成は無限につづくということだ。芦屋浜の場合でも、お隣の西宮浜、あるいは、神戸の「ポート・アイランド」「六甲アイランド」と同様に、「新」芦屋浜、「新」西宮浜というぐあいに「新」のついた人工島がいくらでもでき上つて行くことになる。私の住居の窓からも芦屋浜の人工島のむこうに「新」芦屋浜の人工島のひろがりの一端が望見できるが、そこもちろん地震のあと液状化現象を起こして一面の泥海となつた場所だ。そこにはまだ幸いにして集合住宅も住宅も建てられていなくてそれこそただの「さら地」だったので、地震のあと、芦屋の被災地から膨大に出た全壊家屋の廃材や自動車の残骸などを切れ目なしのトラックの列で運び込み、人工島のあちこちに山をつくつて「野焼き」する現場になつた。おかげで地震後ずっと私は窓からその「野焼き」のさまを昼となく夜となく見つけたのだが、深夜、紅蓮の焰をあげて燃え上るそのさまはまったくこの世のものと思えない光景だつた。そして、ある日、「野

焼き」が突然止んだのは、そこでのダイオキシンの堆積が途方もない量に達したと新聞に報じられたからだが、それまでダイオキシンをふくんだ風と空気を私と私の家族はたつぷり吸い込んで暮らしていたことになる。いや、「野焼き」が止んだあとも、人工島の灰を本格的に除去したという話は聞いていないから、私たちはたぶん今もまだ十分にたつぷりとダイオキシン入りの風と空気を吸い込んでいるにちがいない。

「野焼き」と「ダイオキシン」の「新」芦屋浜の人工島ともとの芦屋浜の人工島、その二つの人工島のあいだを貫通して西から東へ、私の住居の窓から言えば右から左へ隣りの西宮浜の人工島になくかたちで伸びて行くのが、「六甲アイランド」の人工島から関西空港というこれまた人工島の海上空港へ達する湾岸道路だが、これもまた地震にさいして橋脚が崩壊するという予想外の事態を生じた、その意味での欠陥道路だ。崩壊の個所は、私の住居の窓からは芦屋浜のばかでかいゴミ焼却場の背後に隠れて見えないが、そのつい横の新旧二つの芦屋浜に海をまたいで架けられた橋は、でき上って正式の開通を待っているところで地震に遭い、つぶれた。こちらは九五年、完成前の新橋の破断だが、私の住居の窓から見て反対側の西宮浜の人工島から陸地にかかる九四年完成の立派なアーチを持った大きな新橋の橋脚も落ちてしまった。この新橋の破壊のさまは、地震のあとさかんにテレビジョンで放映していたから、見られた方はいらっしやるにちがいない。その新橋「西宮大橋」は今も立派なアーチを撤去されたただの橋として私の住居の窓から見える（私は震災について、被災後一年近くかかって「被災の思想・難死の思想」——朝日新聞社——と題した大部の本を書いた。読まれるといい）。

六

西宮浜の人工島は工業団地とヨット・ハーバーやホテルなどの観光施設建設をもくろんで芦屋浜よりおそい時期に造成された人工島で、地震のあとの液状化、泥海化、交通途絶、さらには「新」西宮浜での「野焼き」、ダイオキシンの堆積などすべて芦屋浜の場合と同じだが、もうひとつ同じことがあつて、それは西宮浜、芦屋浜ともに二つの人工島には、震災後三年半経った今も、家を失なった被災者が居住する仮設住宅があることだ。ただ、芦屋浜の仮設住宅は私の住居からは見えない。西宮浜の仮設住宅は、アーチを失なつてただの橋となつた「西宮大橋」のとっかかりに位置していて、海ぞいに三列をつくつて長く伸びたその姿は私の住居の窓から対岸によく望みできる——と書きかけたが、西宮浜の仮設住宅は高さが背後の工業団地の工場やら倉庫やらの建築群にくらべてあまりに低いので、よほど注意しないと存在に気がつかない。私の住居に来る客も私に言われて「ああ、あれが」ということになるのだが、これは今、日本全国でほとんど忘れかけられている仮設住宅、そのなかの被災者、そして、「阪神・淡路大震災」全体の姿をよく言いあらわしている事実であるにちがいない。

芦屋浜の仮設住宅は超高層、高層林立のかけでまったく目立たないし、「ポート・アイランド」や「六甲アイランド」の美レイ・ゴーカーなホテルやらオフィス・ビルやら集合住宅やらの近くにひっそりと静まり返つたように、そしてまた低く這いつくばつて存在している。仮設住宅の列に気づく人はホテルの客やオフィス・ビルのビジネスマンはもちろんのこと、集合住宅に住む人工島の住民のなかにさえ少ない。昨年夏、水道代が払えず水道の供給をとめられた老女性が「餓死」、あるいは、「渴死」し

た仮設住宅は「ポート・アイランド」の美レイ・ゴーカーなホテルの近くの仮設住宅だったのだが、今年の一月十八日、首相までが来て（しかし、彼はすぐトンボ返りに東京に帰った）「公式」の震災三周年の追悼式が行なわれた十七日の翌日、美レイ・ゴーカーなホテルがつい近くに見えるその仮設住宅でそれまでに「孤独死」あるいは、それに近いかたちで死んだ二十一人の追悼式をしているさなかに、四五歳の女性がひっそりと一九三人目の「孤独死」をとげている。

震災三年半目の今年一九九八年六月現在の数字で言えば、兵庫県全体で仮設住宅人口は世帯数で約一万八千世帯。そこでの生活がいかに困難であるかは、「孤独死」の数が六月十六日現在で県警発表によると、これまでに二一七人（男性一四九人、女性六八人）に達していることと判る。これは兵庫県内の仮設住宅のなかでの「孤独死」の数で、どこかのアパートで、あるいは他府県で人知れずひっそりと死んだ「孤独死」の数は入っていない。そして、せっかく抽選で当たって仮設住宅を出て災害復興公営住宅に入れた人たちのなかでも、「孤独死」は今年四月以来六月に至るまでの二月のあいだだけで三七歳から八六歳の中年から老年に至る七人（男性六人、女性一人）が出ている。死因の内わけは自殺四人、病死三人。この死因の内わけにもおどろくが、死者の数に圧倒的に男性が多いのにもおどろく。今まったく仕事がない——ことに男性にない被災地の苦しい現状がここにも明瞭に示し出されている。

とにかくこの三年半のあいだに、被災者がこれまでに手にし得た援助金は「義援金」からの二十数万円。これでは行政側が口を開けば言い出す被災者の「自助努力」による生活再建はとうていできるはずもない。被災者の多くは「自助努力」の土台となる生活基盤さえも地震によって根こそぎ破壊さ

れてしまっているのだ。まず、国、ついで自治体が自らの責任において最小限必要な「公的援助金」を支給し、被災者の生活基盤を回復すること——この土台形成があつて、はじめて生活再建は可能になる。これは個人財産の補償ではない。あくまで生活基盤回復のための最小限の「公的援助」だ。もちろん、これだけでは十分ではない。だからこそ、「義援金」が必要になる。まず、土台に国、自治体——二つの「公的援助」の上に「義援金」が乗る。これがどう考えても救済のあるべき姿かたちで、まさに「常識」に基づいている。世界の「先進国」はたいていこの常識に基づいて被災者救済を行なつて来ているのだが、わが「経済大国」、その意味での大先進国の、そのはずのわが日本だけは、すべてを「義援金」にまかせるという常識外れ、本末転倒のことをこれまでやつて来た。

私が被災地の思いと志を同じくする市民とともに、自然災害での被災に対して「公的援助」を行なうことを法制度として確立する市民運動を九六年三月に始めたのはまさにこの常識に基いてのことだが、これまでこの運動がいかなる成果をあげたか、あげ得なかつたかについて（成果は、自然災害での被災には、被災者の生活基盤回復のための「公的援助」が必須だという「共通認識」を政治の世界につくり上げたことだ。この「共通認識」に基いてまだまだ不十分ながら、「公的援助」を可能にする法律ができ上つた）、ここで私は子細を書くつもりはない（子細の多くは、私の最近の著作、「これは『人間の国』か」——筑摩書房——のなかにある。これも読んで下さると幸いだ）。ただ少し述べておきたいのは、これまで「公的援助」をかたく拒否して来た政治の側の常識外れ、本末転倒の理屈についてだ。その理屈はこの日本の政治の現状を端的にあらわしている。

まず、「天災」に対して、政治は責任はない。だから、「公的援助」はする必要がない。いや、すべ

きでない——これが理屈の第一だ。

しかし、「天災」は、必ず「被災」をひき起こす。「被災」が「人災」にならない安全な社会を形成、維持するためにこそ、市民は税金を払って国と地方自治体の政治を形成、維持している。政治には、「天災」を「人災」にかえない責任がある。私がさつきから書いて来た「孤独死」などの事例は、政治がその責任をはたしていない事実を隠しようもなく明瞭にしている。

政治の側はまたこう言う。「公的援助」は個人財産の補償になる。日本のような政治、経済制度の国（つまり、「資本主義国」だということだ）では、やる必要はない。やってはならないことだ。他の「先進国」もやっていない。この理屈で「公的援助」を拒否したのが誰であろう、首相であるとともに当時はまだ「社会党」としてあった「革新政党」の委員長の「人にやさしい政治」を標榜していた村山富市氏だった。事實は記憶にとどめておいていいことだが、この理屈のマヤカシは、「公的援助」はすべて日本と同じ政治、経済制度の「先進国」がやっていることだという一事が明らかにしている。アメリカ合州国はまさに「資本主義国」、それも「資本主義国」中の「資本主義国」だが、自然災害の被災によって市民の生活が危機におちいる、民主主義国家の基本は市民にある、市民の生活が危機におちいることはすなわち民主主義国家のアメリカ合州国が危機におちいることだという論理・倫理の展開の下で、「阪神・淡路大震災」一年前のノースリッジ地震において、最高二万二〇〇ドルに上る「公的援助」を連邦政府と州政府の責任で行なった。これによって、アメリカ合州国はただの「資本主義国」「経済大国」でない事実を示したのだが、わが日本は被災者に対する「公的援助」は拒否しつづけて来ながら、バブル経済での大儲けの失敗に始まる金融破綻は国家の危機として、何十兆円にも上る「公的

援助」をそれこそまさに個人財産の補償として、そこでの責任、汚職、犯罪を一切不問にしてすぐさま行なおうとする。これでは、日本はただの「経済大国」で、民主主義国でもなければ、市民が安心して暮らして行ける「人間の国」でもない。

人間にとって、自分に責任のないことに責任をとらされることほどむごいことはない。当事者に明確に責任のある金融破綻に対しては責任をとらせなくて、地震での被災という被災者にまつたく責任のないことに「自助努力」のかたちで責任をとらせるのは、そのむごいことのひとつの例だ。これは「文明」ではない。「野蠻」だ。

「野蠻」の身近な事例を書いておこう。私が住居の窓から見ている——今このくだりを書いていても見える対岸の西宮浜の仮設住宅も、たしか何カ月かまえ、「餓死」の「孤独死」の死者が出た仮設住宅だ。

七

話を進めよう。

まず、書いておきたいのは、私がなぜ、私の住居の窓からの眺めにかかわらせて、被災地の問題をこの「私的評論」「私的文学論」のなかでこれまで長く書いて来たか、だ。

理由は二つある。

ひとつは、まず、それが現代日本、そして、さらには、現代世界の問題をあらわしているからだ。もうひとつは、それが文学の問題としてあること。「私小説」「私文学論」の問題としてあるかどうかは知らない。「私的小説」「私的文学論」の文学の問題として、それは明確にある。

第一の理由から考えてみよう。

私の住居の窓からの被災地の眺めは、そのまま現代日本の眺めだ。自然破壊の乱開発。山脈に強引に這い上る街並み。街を貫通する高速道路。無限にひろがりつづく人工島の造成。オフィス・ビルであれ集合住宅であれ、超高層、高層建築の林立。科学技術の過信。住民無視の強引な区画整理。道路の拡大。環境破壊。ダイオキシンの堆積。空気の汚染。そしてまた、「政・官・財の癒着」。「土建屋の政治」。「——市株式会社」の形成。「革新」の消滅。「選挙」の形骸化。「総与党体制」の確立。全体を通してある経済優先、つまり、「金」と「物」中心の政治。……こうしたことは、現代日本のごへ行こうと、程度の差こそあれ、存在していることだ。そして、そのすべてが「経済大国」をつくり上げている。

いや、ことをもう少し正確にしておこう。自然災害と言わず大戦争による被害にしろ、大災害はものごとの外側のもろもろの飾りをその大きな衝撃力で払い落として、それまで飾りによって内側に押し隠されて来た問題、矛盾を噴出し、ハラワタを露出するのだが、私の住居の周囲の被災地は今まさに問題、矛盾の噴出、ハラワタ露出の現場だと言ってよいだろう。その問題、矛盾、ハラワタが「経済大国」のどこにもある、その内部を貫通している問題、矛盾、ハラワタであることはあらためて言うまでもないにちがいない。私がこれまでこの文章のなかで被災地のその現場のさまを子細にわたって書いて来たのは、バブル経済崩壊後の日本が、その崩壊の衝撃力で飾りを払い落とされて、これまで押し隠されて来た問題、矛盾が噴出、ハラワタも露出して来ているからだ。問題、矛盾もハラ

ワタも、その大部分が被災地のものと同じだろう。ちがいは、被災地のほうが、私の住居の周囲の被災地の眺めが示すように、より強烈、鮮明でよく見えるだけのことだ。

もうひとつある。それは、問題、矛盾の噴出、ハラワタの露出を、根本的解決を見つけ出して知る知恵も勇気もないままに、またさまざまに飾りをつけて押し隠そうとする努力が今なされて来ていることだ。これも被災地にもあれば、日本全国にわたってもある事態だ。ただ被災地でのほうが、より強烈、鮮明に見える。努力の目的は明瞭だ。またもや飾りで問題、矛盾、ハラワタの噴出、露出を押し隠して、あたかも噴出、露出がなかったかのようにして、これまで通りのことをやって、これまで通りのものにする。これは、今、被災地の政治、経済が露骨にやって来ていることだ。それはすでに述べた。

問題はここで二つ出て来る。ひとつは、そのこれまで通りのことをやってこれまで通りのものにするのがいいことなのかどうかということだ。もちろん、ここで、「いい」と言うのは誰にとつての「いい」なのか、ということになる。この「誰」のなかには、人間ばかりでなく、他の生きもの、自然、環境も入る。そしてまた、何を根拠にして、いい、わるいを決めるのか。

次の問題はこうだ。はたしてこれまで通りのことをやって、これまで通りのものにすることができるか。これは日本全体の問題でもあれば、被災地の問題でもある。もちろん、被災地のほうが、問題は強烈、鮮明に出ている。

被災地の復興で国や県や市の政治の側がもくろんだことは、まず、市民の生活の再建ではなくて、道路や建物や港湾施設の復旧だった。市民の生活の再建はあとまわしにしてでも、そちらのほうをや

れば、震災で破壊されて大きく縮んでしまった「パイ」はまた大きく拡大し、その拡大がまわりまわって市民にまわって、生活の再建はなるというのが、額面通りに受けとつての行政当局の主張だが、ことばをかえて言えば、これはこれまで通りのことをやって、これまで通りのものにするということだろう。しかし、三年半後の結果は、すでに見て来た通りなことだ。知事自身が、これでは復興にならない、市民の生活の再建がまず必要だと、被災後二年この方式での「復興」を推進したあと、おそまきながら言い出した。これは当然のことだろう。立派な店舗が再建されても、被災者に金がなければ、誰も客に来るはずがない。私の住居からの被災地の眺めの各所には商店街があるが、たしかに店舗の復興はそれなりにでき上つていても、どれもこれもただひたすらさびれている。これは、もちろん、経済が行きづまつて来た日本全体を先どりした姿でもある。

八

しかし、こうしたことのあるりようは日本だけではなく世界全体のことでもある。話をまず「先進国」だけのことに限つて言えば、日本ほど極端ではないにしても、また多くがほとんど無策お手上げの日本の場合にくらべてさまざまに解決への手だて、努力はなされて来ても、さつきあげた自然破壊の乱開発から経済優先、「金」と「物」中心の政治に至るまで、たいていが世界全体の問題としてあるにちがいない。政治における「革新」の消滅、「総与党体制」にしても、これまた日本ほど極端でないにしても「先進国」を貫通する問題であるにちがいない。

第二次大戦後の戦後このかたの現代世界に大きな衝撃として働いて、外側の飾りものが落ち、問題、

矛盾がはっきりして来たのは、旧ソビエトの「ベレストロイカ」から始まって、「ベルリンの壁」の崩壊、冷戦構造の終結、社会主義国の解体、全体としての「社会主義世界」の消滅に至る一連の事態だった。もちろん、社会主義国、その世界にあつても問題、矛盾があまりに巨大に堆積して噴出、その力で外側の飾り物が落ちたとも言えるにちがいないが、これはニワトリが先かタマゴが先か、の議論だ。かんじんなことは、問題、矛盾、ハラワタがさらけ出されて来たのは、社会主義国、社会主義世界だけではなかったことだ。いや、もはや「資本主義世界」ただひとつとなつた今、世界の問題、矛盾はいつそう明瞭になつて来ている。早い話、「先進国」の「繁栄」を世界の貧しい国々が追い求めるのはよろしい。しかし、それでほんとうに「繁栄」を手にすることができるのか。できたところで、その「繁栄」はいいことなのか、いや、そもそも誰の、何んのための「繁栄」なのか——答は「アジアの時代が来た」といつときもてはやされたアジアの現状がすでに明瞭にしているように見える。

私は私の住居の窓から被災地を見ていて、ときとして世界に対しているような気になる。そこには乱開発のあとのすさまじい自然から、超高層、高層建築の林立から、世界の貧困国を思わせる仮設住宅に至るまでの、そこでの「餓死」に至るまでがあつて、それは、つまり、世界——現代世界だ。

九

ここで文学論——「私的文学論」になる。

もちろん、作家、詩人、評論家、劇作家、もろもろの文学者がこうしたことすべてを無視して、それがまったくないものとして、あるいは、自分にもつともかわりあいのないものとして暮らし、書

いて行くことができる。私は彼らを批判、まして、非難するつもりはない。「文明」の要諦は自由。何を、どうしようが、あるいは、しまいが、原理的に人間は自由だ。たとえば、今私が述べて来たような現実を自分の世界から放り出して、自分好みの疑似現実バーチャルリアリティをいくらかでもつくり出すことはできる。これは当今の日本の文学の世界ではやりになっていることのひとつだが、それが一向に新奇なものに感じとられないのは、鴨長明が死体の数を「四万二千三百余り」と丹念に数え上げた世界で、「源氏物語」の疑似現実を自分の邸宅にみごとにつくり上げていた偉大な伝統をわが日本はもっているからだ。しかし、地震は、いつ、どこでも、誰に対しても起こる。それは、場合によつては、いつ何んとき、どこにおいても、また誰に対しても「文明」が「野蛮」となつて人間に襲いかかつて来て、生命とともにその人間の人間としての基本である「自由」を奪い去るかも知れないことだろう。私が私の住居の周囲の私にとつての被災地でもあれば全世界でもある被災地に対しているとき、思うことのひとつはそのことだ。被災地が周囲にあることは、もちろん、私自身が逃れようなくそのまっただなかにいることだ。

私にこの思いがある以上、どの方向にどう視線をむけようが、私は被災地であるとともに同時に全世界である被災地を無視することはできない。そこに対する——まともに対するほかはない。ということは、同時に全世界である被災地のありよう、その方向をいいものとして是認するか、それともまぢがいとするか、価値判断をすることだ。いや、しなければならぬことだ。ただ対しているだけでなく、そこにまともに対しようとするなら、これは必須のことだろう。判断を下すこと自体をふくめて、これはまともに対しようとする人間の基本の倫理だ。

なぜ、まともに対しようとするのか。それは、やはり、私の住居の対岸に、長くつらなる仮設住宅の列があり、そこに「餓死」をふくめた人間の人間ならざる暮らしがあるからである。その暮らしが端的にあらわす、「文明」ならざる「野蛮」があるからである。この「野蛮」をふくんで存在する被災地、いや、全世界は、そこにいかに「文明」の装いがさまざまに美麗な飾りをつけてひろがつていようと、私は是認しない。その是認できない根拠に文学——私の文学がある。いや、逆に、私は文学をそうしたものとしてとらえ自分で自分の文学として書き、その自分の文学を是認しない根拠におく。これが私の「私的小説」「私的文学論」だ。

誤解のないように言っておきたい。私はここで、飢えたる民がこの地球上に存在するかぎり、書くことに意味はないとするサルトル流のことを言おうとしているのではない。その主張は書くこと、文学の有効性にかかわっている。有効性にかかわる以上、その書くこと、文学によって動かされる人、あるいは、動く人間——他人がかかわっている。あるいは、その他人の数がかかわっている。

私が今書いていることは、本質的にはただ私自身ひとりにかかわっていることである。だから、「私的小説」であり「私的文学論」だ。

さらにもうひとつ、誤解のないように書いておきたい。私が述べていることは、たとえば、その是認しないこと、是認できないことを直接の対象として評論を書く、小説をものにするのではない。もちろん、私はこれまでにならした仕事をして来たし、これからもするだろうが、これは本質的な問題ではない。何を、どう、どこで書こうが、私にはその是認できない自分がある。その自分が私にあって、私は書く。これが、私がここで述べておきたいことだ。

つづきは製品版でお読みください。